

## 第2回 紀行文

「大山の秘密のスケッチ場所」

秋冷の澄み切った青い空、昨夜積もった山頂部の新雪、麓にはまだ散り終わらないブナの紅葉、こんな日は一年を通じてもわずか一、二日しかない。今年は11月3日だった。

広島を朝8時にマイカーで出発。約160km先の江府町御机地区には11時着。天気も快晴で山頂部は雪が白く輝いている。イメージ通りの風景である。近年ここはカメラマンが多くなり、いいポジションは既に取りられているが、私はスケッチなので一向に構わない。スケッチは20分もすると一段落した。

弁当を食べ、次のスケッチポイントの鍵掛峠に向かおうとした。ところが大渋滞である。しかしこれは織り込み済み。すぐ県道52号へ迂回する。すると今度は日光小学校のところがスケッチポイントとなる。ここでも若いカメラマンの先客がいたが、その横でここも約20分でスケッチを済ませた。

次は大野池に向う。しかし冬の陽は短い。既に陽は西に傾き、逆光となり、しかも雲も出てきたため、もう一箇所のスケッチポイントに急いで向かった。ここは誰にも詳細な地名は明かしていない私だけの秘密の場所で、大山の裾野が雄大に捉えられる。他のカメラマンや絵描きは一度も見たことがない。しかしここも逆光でスケッチしづらい。結局翌朝に回すこととした。

一夜明け、当日も快晴で絶好のスケッチ日和だ。まず昨日の秘密の場所に向った。誰もいないし、朝の冷気で手がかじかむ。予想通り朝日が美しい。スケッチを始めて約十分も経っただろうか、一人の女性が朝の散歩中とあって近づいてきた。

「わたしの父も絵描きで、よく南壁を御机から描いていた」と言われた。

ハッと思い出し手が止まった。それは約二十四年前のこと。私が御机でスケッチを終え、広島へ帰ろうとしていた時、バス停でいつくとも知れないバスを待っているひとりの初老の方がいた。声を掛けると鳥取に帰るとのこと、一緒に近くの国鉄の駅までいくこととなった。初対面ではあるが会話がはずみ、初老の方が「結局、売れる絵は大山しかない」と言われた。エッ、絵を売って食べている人か。まだまだ駆け出しの私が大山の絵の自慢話をしようとする矢先である。とたんに尊敬語になった。降りられる時に名刺をもらった。著名な方である。自慢話をしなくて良かった。浅はかな自分を出さなくて良かったと胸をなで降ろしたことを思い出したのだ。しばらく間があって再び描き始めた。

しばし会話の後、女性は来た方向に帰って行き、私はスケッチを続けた。

その後、大野池、豪円山、元谷をスケッチし、昨日とは逆に大渋滞の観光コースを自宅に向かった。

家に帰って本格的に着彩し、数点は個展向けに油絵で再構築するつもりだ。